

94

83

Ⓜ

宗教と人

020714-000-5

94-83

宗教と人

山田 蔵太郎/編

M35

ABI-0534





宗門の教

人

世嘉青年會 刊 日本

言

人故其大雅に由り、境遇に由り、年齢に由り、賢愚貧

富、其の異なる所一様ではない然し人

の行動の目的は異なるに外ならぬのである。

或は其の行動の目的を以て行人の匆々たるを見よ、馬

車、或は其の行動の目的を以て、自転車を飛

走る、或は其の行動の目的を以て、歩きたるも、ある、歸るもあ

る、或は其の行動の目的を以て、亦抑も何の爲め、所

無き、或は其の行動の目的を以て、道途の熱闘なるもの、畢竟肚裏



万に踏まれる要求の行走に外ならぬでは無い  
乎。有は高位高官を、或者は衣美を、或者は金  
財を、或者は學問を、或者は智識を、名譽を、或者  
は古閑を拂はんとて、或者は安心を得んとて、或者  
は一碗の食に事を缺きて其れを、或者は餘りあり  
て尙多く其れを、或者は或る其他の者をば、各其要  
求に向つて紅塵を捲きつゝある街頭一日の光景  
を正しく活社會の縮寫と言ふべきである。求して  
然らば社會とは要求の意義である、生活とは要求  
の實現である。世界も其意義である、歴史も文明も  
此に於てある。人生とは畢竟要求に外ならぬではな  
き乎。

然り人は生れた途端既に要求に着手するのであ  
る。然し人は二種の方面を有して居ると共に、其要  
求も概して之を二面に大別されなければならぬ  
即肉體的要求と心靈的要求と是である。肉生上の  
要求は衣食住に現はれて人類全体に通通せるが  
如く、靈生上の要求も同じ事實を以て現はれて居  
る。是れ何の時代、民族、社會を問はず宗教の世に存  
した所以で、而此存した所以は今日將來共亦人に  
宗教が重なる所以である。故に人生一方面の意義  
は肉生にあるが然し人は尙靈生上の要求を以て



他の二方面を備へなければならぬのである。若し人にして唯肉生的要求をのみ満足せしむるに汲々として、他の要求を度外視するならば、それは不具なる生活と謂ふべきである。一層嚴格に言ふならば、無意義なる生活と謂ふべきである。なぜなれば地上一切の價值は、人生究極の目的から割出して判断せらるべきものであるに、肉生的要求は唯死に終る外、他に何の用事もなく、連絡もないからである。我々が地上の生活は、他日天上の生活に入る前提である、而も前提のみで結論のない肉生が何の意味を有するであらう乎。斯くの如きは寧

滑稽なる生活と謂ふのが適當であらう。なぜなれば其握りのめたお手の裡から此世がみすく遁げ去る時の到るのも知らないで、得たり焉として居るからである。人生とは若し斯くの如き滑稽に終るものとするならば、十字街頭の熱鬧はそも何の逆上ぞ、文明とはそも何の茶番ぞ、世は如何に進歩するとも、人は畢竟醉生夢死ではない乎。走屍行肉と謂はるべきではない乎。

否、人生は眞面目なるものである。

聖書に曰く、人は唯パンのみを以て生くべきに非ず、乃神の口より出づる言を以てす(マトフエイ)と。要求



的活物の要求すべき最大の道は、そこに歴然とせし  
て且嚴かに示されてある。此書收むる所は、宗教の必要と、倫理と宗教との關  
係を説明せる二篇と、添ゆるに露文小品の抄譯數  
篇とを以てしてある。一小冊子固より標題の全豹  
を闡明し能ふ所ではないが、而も多少なりとも讀  
者に裨益する所あらば吾々の本懐である。

明治卅五年十一月中浣

編者識

### 小言

一 無宗教者への警告と題する鈴木司祭の講演  
は「アパルト」ベルソイ氏の論文に負ふ所多く、之に  
演者の説を加へ、大坂自助青年會にてせられし也。  
一 瀨沼神學士の根本的倫理問題の一篇は、會て  
我が正教青年會に於て講演せられしものなり。  
一 附録天籟は露國キエマ神科大學刊行の雜誌  
ウオスクレスノエ、チ、テニエの誌上より拔萃せる教  
訓集の抄譯なり、篇中物語に關する者は原文の意  
を汲みて譯し、其他は力めて原文に依れり、最後の  
雨の一篇は他書に據る。



# 宗教と人

## 目次

無宗教者への警告 司祭 鈴木九八講演

- 一 余輩は聞くだに宗教を好まず……と。
- 二 余輩は宗教に據らずとも生くるを得る……と。
- 三 宗教は司祭の仕事にして余輩の關する所にあらず……と。
- 四 宗教談は措いて他事を語らん……と。
- 五 宗教は何れも皆善し……と。
- 六 人は須らく生國の宗教を奉すべし……と。

## 根本的倫理問題

神學士 瀬沼恪三郎講演



はなく、それで宗教上の事と言へば、直ぐ罵詈訾弄  
を逞ふして醜として耻ぢないのである。然らば自  
身には他に確乎なる定見があつて然る譯である  
かと言へば、決して左様ではない。元來事に冷淡な  
る者ほど口舌に辯むのなほなく、畢竟する  
に宗教上の問題に極く冷淡なるからの致す所て  
あつて、斯様な人に向つては如何に誠意を盡して  
注意を促しても、全く感應せぬものが往々ある。少  
し眞面目になつて話し掛けると、イヤ宗教談は眞  
平御免である、外の話ならば何にまれば話敵にもな  
らぬが、そればかりは余輩は聞くのも嫌である

言出す。

余輩は聞くだに宗教を好まず……と。何故さう嫌  
であるか我々は實に了解に苦まざるを得ない。抑  
も宗教とは何ぞや、是れ已に大問題である。宗教即  
ち Religio は元と拉典語であるが、既に此語が文明  
世界の國語たる權利を有するに至つた丈の事實  
から見ても、宗教其ものゝ勢力が知られるのであ  
る。そこで此語の意義はと言ふならば、之に就ては  
種々の解釋がある。シセルは此語を Re-legere といふ  
動詞から來たものであると言つた。譯すれば、例に  
取置く、特別の使用に定める、通常の物から異は出



す、等の意義で、言換ふれば、特種の注意尊敬を以て  
 關係する、と言ふ事である。斯かる見解からしてシ  
 セロは、宗教を或る秘奥神靈なる者に對する虔恭  
 と謂ひ、又畏を充つる敬禮と定義を下した。然るに  
 ラクタンチイは之と見解を異にして居る。Religare  
 (結ぶ、合す)と云ふ働詞から出た語であるとして、其  
 解釋からして宗教を人と神の結合と定義を下し  
 たのである。其他ラウツマチンに至つては、更に一  
 歩を進めて單に神人の合同とせず、人が神と新に  
 合し又は重ねて立つる所の合同と定義を下した  
 但ラウツマチンはReligioと云ふ語の由來をReligare

即ち再び合すと云ふ働詞から出たるものと見た  
 からである。此くの如く此語の語原に對する見解  
 の異なるに隨つて、其定義にも諸々差違あるのであ  
 るが、然し何の解釋に隨ふとも、我々はそこに一ツ  
 認むべき事がある、即ち宗教とは何ぞやと問ふな  
 らば、人の神に於ける心靈上の契合——所謂神人同  
 盟と云ふ事が其神髓であるといふ事である。然る  
 に神は至高の存在者である、然らば宗教は總ての  
 問題中に在つて首要の位地を占むべきものであ  
 ると云ふ事も自然明白な譯である。隨つて宗教を  
 知るは人生の最大急務である。



更に世界諸國民の歴史に就いて見給へ、何れの民人と時代とを問はず、宗教が其時と人との爲に至大なる關係を有して居たことは判然たる事實である。かのイウヂヤ國民の如きは殊に然りと謂はざるを得ぬ。其國家の安危と社會の消長とは民人が其宗教に對するの如何に由つて決せられたのである。又希臘人の如きも宗教の爲には義戰を敢てした。羅馬人も未だハリストス教を國教とせざる以前は、其古來の宗教を以て羅馬大帝國の據りて以て立つ所の基礎と斷定して居た。ハリストス教の教會史上には幾千萬百の致命者なるものが

現れて居る、自己の信仰の爲には一身を犠牲に供したる熱烈なる人物である、それが鑽石の如き剛硬男兒のみてはない、杖を頼りの老女性もある、二八余妙の處女もある、吹けば飛びもしさうな童女もある、而も水責火責を物ともせず毅然として難に殉じたる悲壯の光景、之を以てするも宗教が如何に人生と沈痛なる關係あるかを窺はるゝてはないか、其他殆ど二世紀に亘りて世界を騒がしたる回々教徒對基督教徒の十字軍の如き、皆等しく宗教上の問題に發端して居る。現今歐米のハリストス教國中殊に宗教國として有名なる露國の如



きは、帝王より庶民に至るまでハリストス正教を  
 遵奉して以て一國の元氣生命として居る。一朝有  
 事の日に當りては『君國の爲め、正教の爲め』といふ  
 言下に身命を投げ出して惜まざるほど露國正教  
 的精神が瀰漫して居る、近來同國の參謀本部は一  
 般軍隊に詠隊を設け、士卒をして教會の讚美歌を  
 練習せしめ、又軍隊に於て禮拜を行はしむるは勿  
 論、宗教上の講演をも開かしめる様にしたと云ふ  
 事である。然るに最も愛國心に富めりと稱せらる  
 る所の我國民が、斯くも國家の上に至大なる關係  
 ある宗教に對して冷を淡々たるのは甚な怪とせ

ざるを得ない。無益なる談笑や、娛樂の爲に貴重な  
 る時間を徒費して、それで宗教上の眞面目なる談  
 論には寸時をも忍ぶ能はざる今人の心事、我々は  
 實に嘆息に堪えぬ。……余輩は聞くだに宗教を好まず……と。けれども人間  
 に取つて最も緊要にして且高尚なる問題は何ん  
 てあると考へらるゝ乎。神は在りや否や、神若し存  
 在すとせば、神と世界との關係は如何、神若し在す  
 とせば、何の時か何等かの秘密を人間に啓示され  
 たる事はなき乎、抑亦人に靈魂なるもの果して存  
 するや否や、人は肉体と共に消滅に歸するや否や、



言ひ換ふれば人は禽獸と幾何の優劣の存するものなるか、人は必ずしも各自の言行に就きて上帝の前に責任あるものにあらざるや否や、此等は皆人間の一大問題ではあるまいか。然るに此等の問題は真正なる宗教を待ちて始て満足なる解決を得るのである。其れにも關らず、余輩は聞くに宗教を好まずと言ふのは、取も直さず此等の問題は余輩に何等の價値なしと自白するのである。余輩は唯見たり、食したり、凡て五官の感觸するところの外、かの永遠の運命の如きは取るに足らざる迂論であると放言するに均いのである。嗚呼五官以上

は何等の感慮なしと言ふ人間、それが萬物の靈長たる者の口よりと思はるゝてあらうか、苟も人として此世に生を享けて、宗教道德上の問題を度外するが如きは、取も直さず人たる尊位を自ら放擲するにあらずして何ぞ。

二 余輩は宗教に據らずとも生活し得る……と。

然るに無宗教者は尙ほ自分を辯護して言ひ遣れる多少の餘地を造る。余輩は宗教に據らずとも生きて居らるゝ、と言ふ是である。さりながら斯く言ふ本人の本心が果して斯く自信して居るか如何か、頗る疑はしいのである。請ふ誠實に我々の説明



を聽き給へ、先哲アルタルフの如きは全く之に反對の意見を有して居た。曰く、  
 若し宗教を要せずして人類社會生存するを得べしとするよりは、寧ろ權閥を空中に築くは易しと。又宗教に對して公平無私の意見を持せる哲學者シセロの如きも、曰く

若し哲學者のみより成立つ社會世上に在りて假定せば、斯かる社會は不具なるを以て、人は其搖籃より出づるや否や忽ちにして自身の滅亡を見むのみ。無宗教者、頂門の鑿礎と謂ふべきである。

ある。  
 余輩は宗教に據らずとも生活し得る……と。けれども宗教は人間に向つて何を要求するものであるか、夫れ真正なる宗教は——父母を孝敬し、忠良を以て國家の福益を進め、他人の權利を尊重し、掠奪品は之を其主に返へし、上帝の傳言者として國君には誠忠を盡し、憤怒に答ふるに温和を以てし、愛と祝福とを以て嫉妬に對し、善を以て惡に報ゆべきを教ゆるのである。是れ或は尋常日用の道徳であつて誰も知つて居ると言ふであらう。けれども現に世に細些なる事にすら公德の缺けたるを概



嘆する聲の喧いのは何の爲である、尋常日用の道徳すら危いと云ふのは、道徳は固と宗教を離れては決して生命のないと云ふ事を証明して居るのである。殊に眞正なる宗教上の信仰に泉を取らなぐては、道徳は決して完ふされ得るものでないと言を事を益々確めるのである。

餘輩は宗教に據らずとも生活し得る……と。然し或は生活し得るであらう。併ながら元來生くるてふ事は、如何なる意義であらうか、飲食する、安眠する、躍る、跳る、見る、聞く、等の娛樂を是れ事とする事であらうか、勿論之も人の慾望の中である、若も本

能主義が全く眞正なる人生觀であるとすれば、人は宗教なくして生活し得るに相違ない。然し本能主義が最も嚴格にして敬虔なる判断の前にどれ丈の價值があるかは、何にも學者を待つて知るに足るものでない、各人に賦與されてある良心に聽きて直ぐ分る筈である。本能主義の立場からすれば、此良心なるものも否認するであらう。然しながら良心は神の聲であると云ふことは断じて蔽ふべからざる、各人の實驗である。然し本能主義を實行すれば直に其人の呼吸が絶へて死すと言はぬ。彼等も必ず生きて居る事が出来るに相違



ない。けれども其は既に真正なる生活の意義から  
 離れたものであると断言し得る。彼等は唯動いて  
 居るばかりであると断言する。真正なる生活とは  
 氣高き精神上の生活、換言すれば屬神的生活それ  
 である。されど神の外に生命の源泉たり得るもの  
 がないのであるから、そこに至つて亦宗教の必要  
 缺くべからざる決論に達する。即ち宗教に據らず  
 して真正なる生活はないと言ふのである。聖書は  
 明白に諸君に告げて居る、曰く、人は唯餅のみを以  
 て生ずべきにあらず、乃凡神の口より出づる言を  
 以て生ず(四の四)と。

余輩は宗教に據らずとも生活し得る……と。然り  
 或は生くるを得べし、然れ共宗教に據らずして死  
 する事が出来やうか。世上幾多の氣隨氣儘者共が  
 血氣盛なる青春時代に當つては無宗教にて生く  
 るを得ると高言し、又實際斯く生活したるに拘ら  
 ず、其晩年に及んで終に宗教なくして安然として  
 瞑目し能はざりし實例を、不幸にして歴史が我々  
 に證明して呉れる。例令は西歐に於て有名なる無  
 神論者モンテスキョーやマルギス、其他の輩も遂  
 にハリストス教徒の死を以て瞑目した云ふ。又彼  
 の無神論者の泰斗とも言ふべきヴォーテル、ルソ



一の如きも、其臨終の枕頭に司祭を招待せんことを  
瀕に家人に求めたけれども、其無神論者の同輩  
が憫れにも其切望を果さしめなかつたと云ふ事  
である。辛い時の神頼みといふ事は、一面に於て人  
の我儘を諷刺した語ではあるが、然し一面に於て  
は人心の本性に存する至誠を言現はした金言で  
あると思ふ。生や欺くべし然ども死の前には寸毫  
の虚偽をも容れざるは人情の極である。無神論者  
が臨終の大矛盾は笑ふべきに似て寧嘉すべきで  
あるが、然し生に處して死に愧ぢずんば更に敬す  
べきであると思ふ。昔聖大シシリイが雅興を過さ

て其師ニウールを訪ふた時、三日食を忘れて信仰  
を談じ、終に其師をしてハリストス教に歸せしめ  
たことがある、ニウール時に問ふて曰く、高上なる  
睿智は何んぞと。シシリイ之に答へて曰く、死を記  
憶するにありと。實に至言であると言はねばなら  
ぬ。凡そ何人たりとも、既に宗教の安慰なくして、既  
目する事能はざるものと知つたならば、寧平素に  
在つて生死一貫の用意を爲すは則ち最上の智と  
謂ふべきではないか。

三 宗教は司祭の仕事にして、余輩の關すべき

ものに非ず……と。



宗教は司祭とか、牧師とか、僧侶と呼ばれるものの仕事であつて、俗人たる者には何の縁故もなく、唯追善、供養、葬式等の場合にのみ多少の関係があるかの如く誤解して居るものゝないでも無いやうである。こは言を換ふれば左の意味となる、即ち神と靈魂及び其未來の事を觀念するは、司祭の事務たるのみ、而して彼の神靈世界と其永遠無窮の幸福は只司祭等に委託せられ、我等俗人には今日ありて明日を期すべからざる現世界を分配せられてあるのみと。あゝ此様な人は餘りに名譽心に乏しく、且其幸福に對して冷淡の甚じき者と言はざるを得ぬ。

宗教は司祭の仕事にして余輩の關すべきもの非ず……と。然れ共己が天賦の智能を以て遙かに後世の學者智者に秀てたるアリストテールの如き偉人は、全く之に反對なる正論を述べて曰ふ、宗教は衆人に關すべきものにして、人類は宗教的の生物なりと。換言すれば人類は宗教上の智識作用に於て特に顯著なる者なりとの意である。斯の様に宗教は人生根本的の要素であつて、到底人間より剝奪することの出來ないものであるならば、神品と俗人とを論せず皆齊しく關係すべき所のもの



にあらずや。宗教は司祭の仕事にして余輩の關すべき者にあらず……と。然れども一生涯宗教上の問題を研究せん爲めに自身を貢獻したソクラト及びプラトンの如き果して司祭であつたか、又宗教を弘布するが爲めに盡力せし羅馬の大帝コンスタンチン、大カールル、露國の大候ウラヂミルの如き其他敬虔なる諸王は果して司祭であつたか。否左様ではない、同じく人間として宗教を學び、かつ之を生活の上に實踐躬行すべきものと心得たものである。

宗教は司祭の仕事にして余輩の關すべきものにあらず……と。然し乍ら司祭が何れの宗教に従事するに際しても、何時も公衆の爲めに奉事せし事は、歴史の保證する所である。乃ち司祭は何處に於ても人民をして神と交際せしめ、神よりの祝福を人民に降すことを慮つてあつた。故に司祭が神聖なる奉事を執行せんとするときは、衆民其周圍に群集し而して司祭は衆人の爲め神に代求献祭しつゝ、彼等をも其所禱献祭に俱に參與せしめてあつた。去れば宗教は司祭のみならず公衆一般の與かるべきものであると云ふ事は判然たる事實で



ある。

宗教は司祭の仕事にして余輩の關すべきものに非ず……と。否宗教は公衆の爲め最も慈善的の要務である。夫れ眞誠の宗教は——無智を啓き、不幸者を慰め、鰥寡孤獨を扶け、罪人を矯正して之に悔改赦罪を與へ、人間に其眞の價値と義務と目的とを識ることを得せしむる者である。換言すれば眞の宗教は——眞理を以て迷誤に、道德を以て罪惡に拮抗する所のものである。然らば宗教は只司祭の業務にして余輩の關すべきものに非ずなと、言ふて居るべきものでない。宗教は實に各人の産業であ

る、國家社會家庭及び全人類の寶藏であると言ふべきものである。然らば帝王は其玉座に於て、征服者は其軍勢と俱に、長官は其議席に、學者は其書齋に、職工は製造場に、商人は其商店に、貧者は茅屋に、富人は其邸宅に於て、何人も皆齊しく宗教を以て各自生命の最も大切なる要務なりと思はねばならぬ。

#### 四 宗教は措きて他事を語らむ……と。

尙或人は申します、宗教は措き何か他事を談せんと。併しながら我々は宗教を捨措いて他に何事を談すべき。今日は天氣故に結構であるとか、又は雨



天て陰氣だとか、普通の婦人達ならは芝居や服装の批評話か、少しく開化した人の爲めには瓦斯蒸氣、電氣とか其他之に類似の談話位であらう。けれども此等の事物の如きは専門家には格別なれども、人類一般の不死なる靈魂の全部を占むべきほどのものではない。もし我々が如此事物の談話にのみ日時を費やさば、恰度古代の閑暇好きなる希臘國のアヒン人に似たるものとなるのである。何となれば彼等は只々新奇なる事柄を質問應答して其日を暮すばかりであつた(使徒行實十の卅一)。去れと宗教は措きて何か他事を談せん……と。

人間は宗教上の問題を全く離れて他に何事をか談じ得る。例へば一粒の種子のこと、一滴の水のこと、一茎の草花のことを物語るにも、誰が之を創造したるか、巧妙なる美觀を以て吾人を驚嘆せしむる所の万有の起原は、一体何處より出たのであるかとの問題に自然立到るのである。見給へこの通常の問題は不知不識の間に入をして宗教上の門内に導き入らしむるではないか。人若し此問題を解決せずして棄措かば萬有の因て來るところの本源と其目的とを識ることが出來ないのである。随つて物の効用如何をも價值をも明に認め難く



なるのである。何となれば物の原因を知らぬときは、假令其物の作用を知つても、未だ全く博識家とは言ふことは出来ぬ。智識とは原因を知るに在りてふことは既に古來よりの定説である。而して翻つて吾邦の現状を鑒みるに、吾邦人が既に歐米各國と交際を開いて以來殆んど三十餘年、今や盛に彼の國々の開明の利器百科を輸入し、之を習得する事に努めて居る。けれども萬有の大本源の知識を解決するの道は唯天啓教に據らなければならぬのである。して此大根原を識らなければ文明は眞の文明を爲さなぬ。其の証據には西洋文明の渡

來して以來却て社會の道德も信仰も大に墮落した。是は文明の形ばかり採つて其精神たる宗教を度外視したからである。又我が邦人は漸々日曜日を休むやうに爲つて來た、が何故に當日を安息日とするに至つたか其起原を知らぬものが多い。尙又邦人にして赤十字社員たるもの既に八十万人以上に達してあるさうであるが、該社が其起原及び精神を何處より汲來りしものなるべきやを全く辨明し居らぬものも少くない。何事にまれば、物の起原の何れよりせしかを知らざれば、遂には全く其精神を失ひて只形式のみに流るゝに至る



ことを免れない。此の通り真誠の宗教に據らざれば萬有の理性を破究して其中に美妙慧智の充満しあるに驚くと雖ども、以て其造物主に光榮感謝の伏拜を献ずることをせず、竟には自分勝手に妄想を恣にして、智識てふ偶像に低頭叩拜しつゝ、愈々傲慢頑固の深淵に落下するに到るのである。

宗教は措きて何か他事を談ぜん……と。去乍ら宗教を措きて何か他に適當なる談話があらうか、昔日希臘國に一人の教師があつた、偶々公衆の中に立つて滔々懸河の勇辯を奮ひつゝ、國家の危急且夕に迫れることを絶叫して熱血熱涙もて公衆

に注意警醒を促した。けれども時の公衆は恰かも之を虫の音ほどにも思はないで、毫もそれに意を留むるものもないのを見て、辯士は急に其話頭を他に轉じて左の小説を語出した。一日或る處に一青年がありて、一頭の驢馬を借りたが、其日は丁度非常な炎天であつた故に、彼の青年は是れ幸と斗りに驢馬の日蔭に休息しやうとした。すると驢馬の貸主が我は汝に驢馬は貸したが其日蔭まで貸したのではないから日蔭は我のものであると言ふ。否驢馬と俱に無論其日蔭も借主に屬して居ると言つて互に口論したが、なうく其落着が容易



に附かなんたと言捨て、徐々演壇を降りやうとした。此時聴衆は急に辨士を呼び留めて云ふには先生何卒只今の御話の落着が如何に成り行きましたか未段まで御話し下さい。是に於てか辨士も殆んどあされたと言はんばかりに、あゝ汝等如何なる人なるよ、驢馬の日蔭話位な事を聞かんと欲して、國家を救ふべき談話には耳も傾けないのか、と苦笑したと云ふ物語りがある。

今日も尙ほ宗教は措て何か他事を談せん……といふ人は丁度かの聴衆に似て居るのである。何となれば真誠の宗教談は實に國家の安危に關鍵する

のみならず、又誠に人生の死活を決する問題である。嘗に現世の死活のみならず、永生と永苦との天下分け目に關係する所の大問題である。之を以て古來宗教上の眞理を探らん爲に、二本の杖を手にしつゝ、世界を漫遊したといふほど道に篤い者もあつた、又専ら神と交際せんと欲して、世を避けて淋しき荒野、深山、幽谷に祈禱の生活を爲せる隱士もあつた所以である。斯くも人間の運命と至大の關係ある宗教上の談論は之を厭ひて、暑い寒い茶話で日を暮らすなどは、餘り淺間敷い事ではなからうか。嗚呼諸君が日を語る所にして、一言終に



神靈上の問題に至ることなく、一年思索する所、如何にして衣、如何にして食はんかに外なく、所謂醉生夢死を以て其生涯を終るものとせば、我々は實に其人の爲に悲まざるを得ない。男兒生れて之れ丈の價値で終るとは何たる腑甲斐なきことぞ。人或は各自の職業に逐はれて、斯かる迂遠な問題に腦を痛める邊がないと言はるゝ乎。或は學生は學生として、學業の外餘計なる問題に醒眠すべきでないと言ふ乎。嗚呼職業何んぞ、學業何んぞ。業は斯く我々人類の本領を掠め去つて亦餘地なからしむるものであるとすれば、人は何の爲に世に生れ

たるか、人生茲に至つて茫漠雲を捉ひに等しきものと謂はねばならぬ。諸君はそれにて甘せんと欲するにあるか、否如何に繁劇なる境遇にある人と雖も、我が心掛次第に依つて必ずや相當の餘裕を保ち得るものである、一國の安危を双肩に荷ふて日夕廟堂に謀を回らす政治家にして、優に宗教、文學の問題に想を泛べて綽々たるもの、吾人往々にして之を見る所である。詩人の一生は多くは替替澹たるものである、而も天才は境遇を衝いて優に別天地を啓拓して居るではないか。召を被ふれるチフ、チエム、必しも閑人とは見るべからず、而も縁



陰深き無花果の下に思を凝らす一再ならずと覺えらるゝてはなきか、夜イイススを訪ひて道を問へるニコライム、亦以て徒手座食の徒ではない。苟も朝に道を聽いて夕に死すとも可なり低の誠意我が心に有れば、醒寤以外の餘地は斷じて我に備はるのである。我々は聖書の中に下の一句を見る、曰く「爾來る時、我がトロアタに於て、カルフに托せし……書籍、殊に革の者を携へよ」(後四ノ一三)と。是れ何人に何人が書き送つた書狀であるか。送られたる人に就ては或は問はずも可なり、抑も送りたる人は何者であらうか、學を講じて讀書に餘念なき門

下生の類であらうか、將亦鞭を執つて學を授くる夫子の列であらうか、然らずば閑散の時を有して辭ばらしに讀書を思ひ立てる隱居翁でもあらうか。否々、そは傳道の驥將聖大パウルである、送られたる者は其弟子テモフイである。此時やパウル自身と言へる如く「我已に祭として獻せらる、我が逝く時至れり」(後四ノ六)とあつて、パウルの獄に繋がれて將に斷頭臺に上らんとする頃である、已に且夕を計られぬ頼み少き餘命を以て、讀まんとしてわざわざ遠地より取寄せんとしたる書とは如何なるものなる、殊に革の者を所望せし其書は如何。無論



舊約聖書もあるべし、其他のものもあるべし、然し其書の如何は深く想像を用ゆるを要せぬ。唯少なき餘命の間にも讀書せんと欲せる大聖の度量と餘裕とは、吾々の大に學ぶべき所であると思ふのである。人は死に瀕しても尙斯の如き餘地が十分ある。元んや五尺大の身を自由に振舞はして居りながら、沈思黙想の餘地がないなどは實に耻づべき至りてはあるまいか。昔ローマの或る善良なる皇帝が、生涯其臣下に仁惠を布かざりしとて、「友は朕は日を失へり」と嘆息されたと云ふ事である。無益の雜談に時を費して、最も肝要なる宗教上の談

論を避くるか如きは、亦是れ日を失ふものである。

五 宗教は何れも皆善し……と。

宗教は何れも皆善なり……と。これ純正潔白の宗教が何の宗教に存するやを究めざる人にして、宗教に對する無分別の極と言はねばならぬ。もし宗教が皆齊しく善ならば、天啓の基督教を擴張せんとする吾人の熱心も、畢竟徒勞に歸するとせんければならぬ。少し考へ給へ、世界人民の渴仰するところの數百の宗教が、互に反駁しつゝある事を知らぬ事はありませんまい。一の宗教に於て道奉せよと命ずる所も、他の宗教に於て之を避くる事を教



四十一  
へてある、又或る宗教に於て眞理とする所も、他の宗教にては之を迷信としてある。故に宗教は皆齊しく善なりとの論は、我々が主憐めよと誦しつゝ、我身に聖號を畫いて眞神に祈るのも、又は南無阿彌陀佛と念じつゝ知らぬが佛様に叩拜するものも皆等しく結構であると言ふと同一である。果して之に相違ないとすれば、基督教が異教を駁したり、又は異教人が基督教徒を窘逐する様な事は萬々有間敷き筈であるが、廣い世界に於ては眞理が妄誕と氷炭相容れずして衝突する事は免かれぬてはないか。去れば宗教は皆齊しく善なりとの言は、

黑白正邪曲直を辨せずして直に之を同視するものである。理否に對する不忠實之れより甚しきはないと謂はざるを得ぬ。此は宗教が各自其殊なる信仰と道德とを有つて居る事を辨せぬのである。ハリストス教は清淨潔白の心を以て信神を教へ、之を以て信者の飲ぐべからざる本分と致してある。けれども他の宗教は却て恥づべき醜穢なる禮儀を以て敬神の道を得たりと心得て居る者がある。例へば我邦にても明治の初年には言ふも憚かるべきものを本尊として拜して居た寺院



もあつた。又先年高等淫賣の眞屈といふ評判を世上に博した神道の一派蓮門教などがある。又天理教もある、又大低の神社佛閣の附近には、墮落書生や放蕩子の遊所なる見苦しき揚弓店がある、騒々しき芝居や貸席や淫賣婦が白晝尙ほ公然横行と云ふ有様である。然るに天啓の基督教に至ては其神が至聖至潔なると共に、其執行する所の禮拜の如きも、簡朴の間自ら莊嚴敬虔の風を存してある故に之を以て彼我宗教の眞否を判定する事が出来なければならぬ筈である。

又只信仰のみではない、道徳も又宗教によつて大

に相違する所がある、去乍ら互に似たる點の無いでもないところから、自稱宗教通人が早呑込にも臆断して言ふには、夫れ宗教は慈悲を説き、儒教は仁義を教へ、耶蘇は博愛を傳ふるを以て、結句煎じ詰むれば同一異名たるのみ、故に何の宗教を信ずるとも可ならんと。嗚呼惜哉、箇様な人は全く宗教の本領及び目的を識らずして、僅かに道教の相似たる部分を以て世界の諸宗教を同一なりと速断するのである。今我々は道徳上に於ても宗教に由て各異なる一事を述べやうと思ふ。例へば基督教に於ては婚配の神聖なる事を説き、一夫一婦の道



を守らしめて、例令如何なる帝王の權威と雖も決して其範圍を犯すことを許さない、神の配偶せし所のものは人之と分離すべからずと云神法に基き、離婚の如きは最も嚴禁する所である。然るに回々教や又昨年吾邦に米國より渡來した「モルモン」宗に於ては、一夫多妻を公認し、又離婚をも容易に許してある。尙又支那人及び吾が國人が聖人として尊崇し居るところの孔子の道教に於ても、天子十二人、諸侯九人、太夫四人、士二人とて一夫多妻を公許してあるが、此の一夫多妻の道教こそ實に人倫の大本を亂し、夫婦相互の義務を破り、家庭の

幸福を奪つて、國家個人の衰頹擾亂を來さしむる所の一大弊根である。之に反して一夫一婦の制度こそ真誠の道德であつて、之に據て始めて夫婦相互の義務親愛を全ふし、家庭の和樂を増し、國家社會をして眞に文明富強の佳境に到らしむる事が出来るのである。然し此は只一遍の道理のみではない、實際上の現象が良く之を證明して居る。諸君は試みに世界萬國の地圖を披き見られれば、一夫多妻を公認してある國が如何に野蠻を極め、又一夫一婦の國民が如何に開化してあるか判然認め得るであらう。悲むべき哉、吾が邦人も斯かる逆倫



の風箏に養はれたるの結果——遂に男尊女卑、畜妾、公娼等の弊風を生ずるに至つた。昔儒家に其名ある一井鳳梧翁が百十六歳にして僅かに十六の小女を妾とし、其時の壽杯の箱に「百かけて相生年の片白髪」と題してある逸話の如きは、儒教家が或は芽出度とて祝すべけれども、基督教の見地よりすれば如何にも言語同断の話である。斯く申すと何んだか男子のみを咎むるやうであるけれども、婦人女子も亦男子と五十歩百歩である。昔羅馬大帝國の末世「プロコンスル」領事の夫人達が、男子を情夫として持つた人数で以て各自の年齢を算へた

といふ程道徳が衰頽したさうであるが、今日吾邦婦人達の現状果して如何であるか。遠く海外に迄て乗出しつゝ、淫賣の醜業をもて國辱を晒すものがあるに至つては、豈に歎息せざるを得ませうか。之に依て見れば、真正の宗教は眞誠の文明を開進し、不正妄誕なる宗教は有害背倫の蠻風を來す所以にして、宗教が皆均しく善なるに非らざるは、瞭然たる事實である。

六人は須く生國の宗教を奉すべし……と。  
人は須く生國の宗教を奉すべし……と。之を分拆すれば左の意味と爲る、即ち人若し一度世に出生



せば、其國教の正邪を問はずして、各自其生國の宗教に盲從せざる可からず、汝若し埃及國に生れしならば、鱈魚と牛神「アピス」を拜み、又「ニキマ」に生れんには、偶像「モロフ」の前に、己が子供を塔殺して燔祭とすべく、メキシコに生れんには、手に劍を提げて人を殺して之を厭ふべき偶像の前に犠牲とせよ、トルコにあらば毎日「アルラフ」神は神なり、「ホメト」は其預言者なりと所れ、而して羅馬に於ては此の「ホメト」を偽善者として詛ふべしと。斯様なる不合理なる意見は何人にも明白なれば辨ずる迄もないのである。けれども惜哉我邦人中には

尙箇様な僻見を懷き居る者決して小數ではないもし幸にも生國の宗教が真正の宗教にして、其傳ふる所が天下無二の真理ならば、勿論各人は其生國の宗教を遵奉すべきであるが、万一生國の宗教が妄誕無稽なるものであるを識りながら、尙ほ斯かる言を唱ふるとすれば、そは實に真理及び善よりも却て迷誤及び惡を重んずる者と謂はねばならぬ。人若し生國の宗教が果して天下無二の真理なるや否やをも究めず、只飽迄て無暗に生國の宗教に盲從すべし、否らざる者は愛國心無しとする一天張論の如きは、實に頑迷無智の至極と謂は



ねばならぬ。今や吾同胞は廣く歐米と交際して其  
文明の利器を輸入し、其長所を取つて我を利する  
に決して躊躇せざるに拘らず、宗教の事に關して  
のみ斯かる偏説を抱いて居るのは、進取の氣性に  
富める吾が同胞にしては、甚だ不似合の事と言は  
なければならぬ。併しながら斯様な謬見は未だハ  
リストス教の眞價を認めざる何れの國民にも有  
り、勝ちのことであれば、宛ち咎むべきでもない。只宜  
しく眞正の宗教を聞くことが肝要である。然らば  
眞理が何れの宗教にありや否やを知るに至るの  
てある。何となれば眞理には古今の差別なく、東西

南北の分ちあるべき筈がない、西洋に於て眞理と  
する所のもの、日本に來りて眞理とならず、又日本  
に於て眞理とする所のものは、西洋にても眞理と  
せらるゝことなくば、決して眞理ではない。時と  
場所は眞理を左右するものでない。故に眞誠なる  
宗教は世界の何處に在つても眞誠なる宗教であ  
つて、各國民人の惡習と妄信に屈することなく、却  
て之を適宜に改良する所のものである。  
この通り宗教は凡ての事物より高尚なるもので  
ある以上は、假令生國の宗教にもせよ眞理に遠い  
ものであるならば、道理の爲めには惜まらずして之



を犠牲に供すべきである。是即ち却て先祖にも忠實たる者であつて、眞の愛國心はそれである。人は須らく生國の宗教を奉ぜしむ。此の誤解は屢々我々の耳にする所なれば、尙一言辨じて置かねばならぬと思ふ。もし各人必らず其生國の宗教を奉ぜざるべからずとせんには、彼の西洋に於て名高き道德家ソクラトが、生國の諸神に於ける禮拜を眞神の禮拜に替へんとせし盡力の如きは徒勞なりと云ふべく。又偶像禮拜を肯んぜざるが爲めに致命せし基督教會の無数の致命者の如きも犬死と呼ぶべしてある。又羅馬帝王中卒先以て基督教

の眞理たるを認め、之を以て國教に改めたる大帝コンスタンチンの英斷の如き、亦無謀の極と言はねばなりません。而も百世猶其功蹟を傳へて嘖々嘆賞の絶えざる所以のものは如何。人若し生國の宗教を奉ぜざるべからずとせんには、深く佛教に歸依し給ひし聖德太子を首とし、佛教を我國に播傳せん爲め盡力せし弘法大師、日蓮聖人、親鸞和尚の如き無智無謀の徒と云はねばならぬ。何となれば佛教は元來吾國固有の宗教ではない、所謂外教である。人必ずしも生國の宗教を奉ぜざるべからず、とせんには、現在ハリストス教の傳道に従事



する處の我々のみならず、元を糺せば同じく外教なる佛教を講ずる所の千万余の僧侶達からして眞先に珠子を投げ、法衣を脱ぎ捨て、以て我國古來の宗教に立ち戻らねばならぬ筈である。然るに却て彼等の口からして箇様な非難を聞くと云ふのは實に怪しからぬ話です。彼等の中には今日も尙未だ排外思想と嫉妬の青眼鏡を掛けてハリストス教を見るものがある。彼等は斯かる惡口を以て愚夫愚婦を瞞着し得ませう。然れども彼等がハリストス教に掛けたと思ひつゝある睡きは、却て其頭上に落つるのを知らぬのである。

序に無神の學者先生達の宗教に對する妄言を聊か辨駁して置度いと思ふ。彼等は申します。宗教は愚夫愚婦の奉ずべきものにして、智者學者の奉ずべきものにあらずと。併し乍ら我々は之に答へて左の如く謂はんと欲す、抑も宗教果して眞理なりとせんか、何ぞ愚夫愚婦に止まらん、智者も奉ずべく學者も奉ずべきものである。尤も一種の哲學として、幽遠なる趣味あるも、宗教としては更に價値なく、唯方便を以て多く諸人を瞞着する所の佛教の如き、或は愚夫愚婦の奉ずべきものかも知れぬ、なれども天啓の眞理たる基督教に向つても尙



斯かる言を發するは智者學者に不似合の言論と謂はねばならぬ。夫れ智慧の元は神を畏るゝにあり(書)智慧)眞の智慧は神に於ける畏怖なり(聖大)リ(イ)とは古聖の言である、又ザドンのテリヤンも無形の上帝を念ふ事恰かも己の目前に在るが如く隨在戰兢して常に己の行爲を質す之を眞の實者と云ふなりと言つてある。金ロイオアソも云ふてある、汝若し己を以て智者と爲さば既に智者にあらず、驕傲は智識の闕乏せる明証にして、善き無智は惡き智識に優ると。慧智者ソロモンも愚人は心中に神無しと言へりと言つた。然らば即ち神を

信せず畏れざる論者自身こそ、却て無智者たるを免れざるものではないか。夫れ眞の學問は人をして有神説に至らしめ、淺薄なる學問は人をして無神論に至らしむるてふ事は、鴻學ペーコンの至言である、固より歐米のハリストス教國と雖も、智者學者と呼ばるゝ者の中に、無神論者排宗教家の無きにあらずである、けれども世の大家鴻儒中には、敬神者の數が常に不信者の上に超過すること二十と一の割合だと云ふ事である。然らば宗教は愚夫愚婦のみならず、智者學者も俱に奉すべきものたるや瞭然である。例合ば



宗教は太陽の如きものである、學者たるが故に其光を要せずと云ふものでなく、又下等の人民にのみ其れを要すると云ふものでない。天下の億兆均しく其恩恵に浴すると同じく、宗教に於けるも亦然るのである。學者先生尙ほ愚夫愚婦説を固持する勇氣ありや。

以上は之を要するに、宗教の人生に至緊の關係ある所以に就いて聊か説明したのである。今此講演を終るに臨みて尙一言青年諸君に向つて警告すべきことがある。諸君は或は既に宗教の必要欲くべからざるを了解せられたるべし、少くとも無宗

教の全然理由なきを認められたるべし。然れども諸君にして若し夫れ丈にして止まば、そは甚だ遺憾なる事である。無宗教の理由なきを識る若くは宗教の必要を認むるが如きは宗教上の問題に於て僅に初歩たるのみ。諸君にして尙ほ進んで止まざる誠意あらば、恰も輕舟に棹して急湍を下るの時、兩岸の風物殆と送迎に違なきが如く、問題は更に問題を捲起して山又山の感あるに至るべし。して夫れ等の問題が釋然として腑に落つる時は、恰も洋々たる大海に泛び出てたるが如きを覺ゆべし。此時の快心はとも如何斗りぞ。卓を叩いて思は



ず快哉を絶叫するに至るであらう。諸君は其佳境に奮到することを要するのである。差當り諸君に提供すべき問題は、神は存在するや否や、宇宙は如何にして現はれたる、如何にせば此罪惡より救はるべきや是である。諸君の中或は半霄夢破れて眠成らざる夜もあるべし、請ふ甲斐なき妄想を以て其肅夜を汚さんよりは、靜に手を胸に置き、此問題に向つて默想を取れ。神は自ら助くる者を助けてふ金言は、此場合にも應用さるべきものである。深遠なる宗教上の問題は、全然人智の範圍を以て總てを解釋し得べきものでなく、所謂天よりの啓

示を待たなければならぬのは無論であるが、然し日常此等の問題に思慮を費すことをせぬもの即ち自ら助くることをせぬやうな事では、假令死者天より甦よみがへり來つて諸君に説く所あるとも、是は必ず徒勞に屬するからである。(十九カ一卅六の) 敢て誓す。



# 根本的倫理問題

六十二

神學士 瀬沼恪三郎 講演

鳥が兩翼あつて能く空中を飛翔するが如く、人も二つの高尚なる希望があつて能く此自然界の森羅萬象より逸出し、卓然別世界の存在たるを想はしむるものである。此二つの希望は何ぞ、不死の希望と道德の圓滿の希望である。それもこれも兩の翼と同じく、二ツながら相俟て始めて意味のあるものである。不死の希望は若し道德の圓滿といふことを欠いたなら何の意味もない、何の目的もな

い、人の爲に幸福と名づくべきものでない。何となれば人は只た不死の者となるのみでは未だ充分とはいはれぬ。圓滿なる道德によつて不死の存在をなす丈の價值ある者とならねばならぬ。又道德の圓滿も若し存在の滅亡を免れぬなれば、矢張眞實の幸福といふことは出来ぬ。

徳義の完全を離れたる不死の存在、不死の存在を有たぬ道德の圓滿——是は二ツながら眞理に反することである。二ツながら我々の理性の許さるる所である。

この不死といふこと、徳義の完全といふことは

六十三



我々の最も高尚なる望であるが、實際に於て即ち自然の秩序に於ては其れも見ることの出来ぬことである。自分の生命を永遠に保存することも、圓滿なる道徳を現實せしめることも、實際に出来得べからざることである、單に希望に過ぎざることである。

一方よりは我々の天性は永遠の生命を求めて居るが、此天性をれ自身の法則は永遠の生命を我々に與へない。他の一方よりは我々の理性と良心は徳義の完全を要求して居るが、此理性この良心をれ自身の法則は、只だ我々の不義不徳を暴いて示

すことは出来ても、徳義を實行する力は與へないつまり不死の存在を得るだけの價值なきものとなしつゝある。

何となれば、我々の高尚なる側の天性に二ツの強敵があつて、互に力を合せて我々を束縛して居る。此二つの敵は即ち罪惡と死である。一は我々の靈的天性の上に動かすべからざる權を執つて居り又一ツは我々の形体的天性を擒にして居るものである。

我々は只だ心ばかりは他の萬物に秀てたものとなりたくとも、死といふ事實があつて我々を萬物



と同一のものになして居る。又罪惡といふ事實があつて我々を萬物より一層卑いものとなして居る。して見れば人間は天性の法則によつてどうしても苦しむべきもの、滅ぶべきものとなつて居る。然るに理性の法則は此不幸より人間を救ふ力を有つて居らぬのである。此事に就て猶ほ詳論せん

## 二

我々人間は生れながらにして、種々様々なる自然の傾向と要求を有つて居るものである、そして此要求と傾向とに支配せられて生活して居るのである。之を名けて自然的<sup>○</sup>生活<sup>○</sup>といふ。

然るに人間の天性は三面のものであるに依て、人は三種類の要求に支配せられる(第一)生物的<sup>○</sup>方面<sup>○</sup>(第二)知性的<sup>○</sup>方面<sup>○</sup>(第三)理想的<sup>○</sup>方面<sup>○</sup>——此三面の天性よりして三様の要求が生じて来る、即ち(第一)己れの生存を保護しやう、永遠に生きやうとの要求(第二)知力の作用を以て此生活を研究しやう、之に就きての智識を得やうとの要求(第三)己れの生活を又他の人々の生活をも、常に其延長ばかりでなく、其内容の方からも一般に圓滿にして行かうとの要求である。

即ち(第一)生存したい(第二)生存を知りたい(第三)生



存を圓滿にしたいといふ要求である。  
 第一の要求即ち生存したい、何時迄も生きて居たいといふのが人間の自然的生活の側ていふと、先づ根本的の要求に違ひない、何となれば俗に所謂「生命あつての物種」で、死んで了つては何を知ることも又何を圓滿にする事も出来ない譯である。然るに此生存の要求は自然二様に分かれる(第一個物或は個人の生存を維持する爲に必要なる營養(第二)種類全体の生存を永遠に續くるが爲に要する繁殖である。營養はあらゆる生物の生活の基礎を堅くするものであつて、繁殖は此生活の目的

である。何となれば若し個物が營養を受けなかつたなら、種類は繁殖することは出来ない、其れと同様に種類が繁殖しなかつたなら、個物の營養を受くる目的は無くなつて了ふ。それ故に人間を單に生物として視て論ずるなれば、我々は自分の子孫を生み出して、そして之を育て上げれば夫れて生涯の務は全ふせられたるものである。我々の存在の萬事は皆此目的に務むるものと見做さねばならぬ。  
 斯く考へて見ると、一世代一世代と移り更はる人類又其中の各個人は、己れの子孫を生み出すが爲



に存在せるものである、そして生み出された子孫は、矢張自分の子孫を生み出す爲に生まれ出たものである。斯ういふやうに皆子孫を生み出すことが人間の生存の目的であるとするなれば、我々の生存の意味は我々自身にあるのではなく、子孫にあるのである、子孫を無きものにしたならば、我々の生存は全く無意味のものとなる。斯かる無意味の生活を名づけて種類<sup>○</sup>の生活<sup>○</sup>といふ。併し此様なる生活は實際生活と名づける價值のある者であらうか。此様なる生活は生活と名づけ

る價值はない。何となれば各世代は次の世代の生れる爲にのみ生存するものであつて、次の世代が現はれると同時に死んで了ふものである。夫故に種類の生活は必竟後から後からと絶えず死に行く人々の全体に於てのみ現はれるもので、一個一個の人々を取ていふなれば、種類の生活といふものは絶えず續く所の死といふても差支はない。既にいひし如く、種類全体は永遠に生きる要求を有つて居るにも拘はらず、今論じたる所に依て考ふれば、自然は永遠の生命を與へない、却て永遠の死を示すのみである。自然の中には實際生きて居



るものは何もない、皆只た生きやうとしつゝ、始中<sup>しちゆう</sup>終<sup>しゆう</sup>死んで居るのである。

今轉じて人の第二の要求即ち生<sup>せい</sup>存<sup>ぞん</sup>を研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>しやう<sup>しやう</sup>といふ知<sup>ち</sup>性<sup>せい</sup>の要<sup>よう</sup>求<sup>きゆう</sup>に就<sup>きつ</sup>て見<sup>み</sup>ても同<sup>どう</sup>様<sup>やう</sup>で、生<sup>せい</sup>存<sup>ぞん</sup>の研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>は結局消<sup>しょう</sup>極<sup>ごく</sup>の結果を得るのみである、生<sup>せい</sup>存<sup>ぞん</sup>の事<sup>じ</sup>實<sup>じつ</sup>よりも寧<sup>ねい</sup>ろ死<sup>じ</sup>の事<sup>じ</sup>實<sup>じつ</sup>を確<sup>かく</sup>むるに過<sup>か</sup>ぎないのてある。知<sup>ち</sup>性<sup>せい</sup>の要<sup>よう</sup>求<sup>きゆう</sup>は一方よりは思想其者の作用だ<sup>だ</sup>けて満<sup>まん</sup>足<sup>そく</sup>せられ又一方よりは存在を實際に取<sup>と</sup>調<sup>てう</sup>べて始<sup>し</sup>めて満<sup>まん</sup>足<sup>そく</sup>を得るのである。これに由<sup>よし</sup>て哲<sup>てつ</sup>學<sup>がく</sup>と科<sup>か</sup>學<sup>がく</sup>の必要が生ずるのである。先<sup>まづ</sup>づ哲<sup>てつ</sup>學<sup>がく</sup>が如何に生<sup>せい</sup>存<sup>ぞん</sup>の解<sup>かい</sup>釋<sup>しやく</sup>をなすかといふに

近世の哲學者中最も人生の蘊奥を暴露したるシ  
ヨベン、ハッセルは、其不朽の著書意旨及び現表と  
しの世界中に左の如く述べてをる。

「人間の存在は元來只だ現在のみのものである  
そして現在が何の滞りもなく常に過去の中に  
消え去つて了ふのは、是れ絶えず死に移り行く  
のである、絶え間なき死である……然るに現在  
は人間の手に入るや否や常に過去と成つて了  
ふ、又未來は全く知ることの出来ぬものであつ  
て、そして之は何時も短いものである。して見れ  
ば人間の存在は既に只だ形式の側だけから見



ても、現在が始中終<sup>しど</sup>死んだ過去に落ち込んで了ふこととである。絶間なく死することとである。若し又之を心理上から観察したならば何うであるかといふに、丁度吾人が歩行するのは誰も知る如く、始中終倒れんとしては支へ、倒れんとしては支へるのであると同じく、吾人の身体的生活も、是れ只だ始中終、死なんとしては止められて居るものである、始中終死期を延ばされて居るものである……我々は空気を一たび吸ひ込む毎に、襲ひ来る死を撃ち返へしつゝあるものである、斯くして一秒毎に死と戦つて居るも

のである。しかし終には死に勝れたる、何となれば我等は已に生れたと同時に死すべき者となつて居るのである、只だ死は自分の獲物とした我々を暫時弄んで、終には腹中に葬つて了ふのである。

斯かる生存の解釋は、決して哲學者の頭腦だけに存する思想ではなく、科學上の研究も矢張全く之と一致してゐるのである。

例令ば地球の現在と過去の生活を研究する學問即ち生物學と地質學は、嘗に個物のみならず種類全体も追々に死に絶えて行くものであるといふ



て居る。動物界、植物界の或る系統や形態は今日最早全然滅却して、只だ化石となつて地中に遺つて居るばかりであるといふて居る。

又天文学も矢張同じ様な實例を天体の中に示して居る。此學問が今日我々に知らしめる所によれば、無数の世界は其初め一定の形もない瓦斯体であつた。そして其最初は今日の白光霞雲星の如く高温度の白光瓦斯体であつたのが、温度の減ずるに隨て白光星となつたのもあり、黄色光星となつたのもあり、赤色光星となつたのもあり、終には表面冷結して光を失ひ、温度下りて水凝り、現今吾人

生物の住む處の地球の如くなつたのもある。或は更に進んで全く冷結体となり、今日の月の世界の如く死滅体となり、空氣も水も全く無くなつたのもある。此順序で推して行けば、我々の住む地球はおろか白光霞雲星までも全く冷結して、太陽も終に其光を失つて死んだ暗黒の世界となつて了ふ時が來るに違ひないといふのは、今日の天文学の説く所である。

更に又、物質の原則と性質とを講究する所の物理学は如何であるかといふに、此學問の結論も矢張同一の死である。其説に依れば、世界のあらゆる現



象は、通常熱と名づくる所の分子の運動が物体の中に起す不平均から生ずる種々の運動に過ぎないものである。然るに此分子の運動即ち熱は次第次第に平均を得て、終には宇宙間に散亂し、宇宙間に到る處同温度となる。其時は今日種々の現象を呈して居るエネルギーは全く止まつて了ひ、隨てあらゆる現象は皆無くなつて、天地は只だ活動のない無差別な混沌たる死塊となつて了ふといふて居る。斯くの如く我々は(第一)生物的天性の要求即ち生存の要求を満足せしめんとして却て死に終るものである。又(第二)知性的天性の要求に應じて

あらゆる存在を研究する時は、其結果只だ死に關する知識を富ますのみである。即ちあらゆる存在の一般の終局は死である、全宇宙は必竟死の國であるといふことを知るのみである。一言でいへば我々は生きやうとしつゝ、益々死に近づき、存在を研究しながら死の事實を益々明白に確實に知るのである。

## 四

以上縷述せし如く、人間は一個の生物として同じく世界全体の運命に従はねばならぬ。けれども人間は意識があつて逆も此運命に安んじて居られ



ない。是れが即ち人間に他の萬物と異なる別の生活の原理がある所以である。

人は常に理性を以て自然的生活が只だ死に至るのみで、自分の天性の根本的要求に満足を與へないといふことを曉り得るのみでなく、又別に理想的天性の原理となつて居る所の倫理的意識即ち良心を以て超自然的生活の道は罪惡であるといふことを知ることが出来るのである。

此罪惡の觀念は全く自然界を逸出したる所の、只だ人間にのみ屬する所の觀念である。我々に此罪惡の觀念があるに依て始めて倫理といひ、道德と

いふものがあるのである。人間以外の動物は、只だ其自然的生活の要求の順はしむる儘に向つて動くものであるが、人間は己れの生物的天性の刺戟を己れの天性と良心とを以て避さることが出来る、そして之に従ふべきか、従ふべきでないかといふ判決を心の中でなすことが出来るのである。他の動物は生存せんとして力めて居るが、人間は更に進んで生存すべき様に生存せんとする所の意旨を具へて居るものである。夫れ故に我々の行動に於ては「我は斯く行ふことを欲するや否や」又「我は斯く行ひ得るや否や」とい



ふ生物的問題の外に又「我は斯く行ふ當きや否や」といふ良心の問題が起るのである。此様に我々の天性の要求は一面には既に言ひし如く、外部から自然に妨げられて居る。他の一面には内部から良心の義務の爲に一定の限界が置かれて居るのである。我々の天性は斯く良心の作用によつて其作用を縛られるが、併し良心の作用も矢張天性の作用によつて妨げられる。一体此良心と天性とは我々の内部に於て常に衝突しつゝあるものであるが亦衝突があつて始めて倫理が成立つのである。若し良心がなくて只だ天性のみであつたな

ら、我々の凡ての動作は善でも悪でもない、他の動物の動作と同じく單に自然界の事實といふの外意味のないものである。之と同じく只だ倫理的意識ばかり存つて、天性の反抗と戦ふといふことがなかつたなら、我々の爲に倫理の問題は起らない譯である。

此二ツの反對の傾向——上に向ふ良心の傾向と、下に向ふ天性の傾向とが、互に衝突する處から倫理の問題が起り、そして亦此二ツの傾向が共に倫理上の意味を有つものとなるのである。即ち良心は己れに反抗する天性に對して律法となり、天性は



良心に反動するに依て不法となり罪惡となるのである。して見ると罪惡は必竟律法によつて生じて來るものである。

蓋律法は怒を致す、律法なき處には犯すことも有ることなし(の十四)

律法の前にも罪は世に在りき、惟律法なき時には罪の歸するなし(の四五)

## 五

斯く人間は自然的生活の道を脱して律法的生活の道に入るのである。併し律法的生活の道に入つたならば、人間は死を

免かるゝことが出来るかといへば、決して然るはな。自然的生活が我々に天性の死を與へる土に加へて、律法的生活は我々に精神上の死を知らしめるものである。我昔律法なくして生きたり、然れども誠の來りし時罪は生きて我は死せり、斯く生命の爲に與へられたる誠は、我に死を施せり、蓋罪は誠の機に乗じて我を誘ひ之を以て我を殺せり(の九十七)良心も、又良心の作用に基いて立てた自然の徳教も、只た天性の傾向を責め、之と戦ふべきことは教ふるが、此戰に勝つ力は與へない。例令ば私が何か



爲さうと思ふ時、良心が之を爲してはならぬといひ、又自然の徳教が之は悪であると教へた所で、私は未だ其行爲を止める氣にはならぬ。却て行ふてはならぬものと知る時は一層行ひたくなる。罪惡の根となつて居る天性の傾向は、我が良心も自然の徳教も、之を抜き去ることは出来ぬばかりでなく、却て罪惡の傾向を刺戟して、無意識のものを有意識のものとするのである、分かり易くいへば、もと知らずして犯して居た罪を、今度は知りつゝ犯す様にするものである。即ち罪の度を一層深くするものである。罪の性質を一層鋭くするもの

である。此事を聖使徒保羅は極めて明らさまに言ふて居る。

然らば何をか言はん、律法は罪なるか、非らず、乃ち律法に由らざれば、我れ罪を識らざりしならん。蓋し律法慾する勿れと言はざれば我慾を識らざりしならん。然るに罪は誠の機に乗じて、我の中に諸々の慾を生ぜり、蓋し律法なければ罪は死せる者なり(ローマ七、八)

此様なる譯で、我々の中に存する倫理的意識即ち良心に由て我々は自然界から脱して、倫理界に入つたけれども、良心は我々を只た倫理界に入れた



ばかりで、此世界に生活する力を與へない。丁度水中に住んで居る魚が陸に出されたといふ様な憫むべき状態に、我々はなつて居るのである。已に此事に就ては諸君も度々羅馬書中の有名な場所を聞き、或は讀みて知る所ならん。併し何時讀んでも其度毎に新しく感ずる、此言を茲に改めて一讀せん。

蓋我等知る、律法は神に屬し、我は肉に屬して、罪の下に賣られたり。夫れ我が行ふ所は我之を知らざる、蓋我が欲する所は我之を行はず、我が惡む所は我之を行ふ。若し我欲せざる所を行はば、乃

ち律法の善なるを證す。然らば之を行ふ者は既に我に非ず、乃我の裏に居る罪なり。蓋我知る善は我の裏即我が肉の裏に居らず、蓋善を欲することば我に在れども、之を行ふことを得ず。我が欲する所の善は之を行はず、我が欲せざる所の善は之を行ふ。若し我が欲せざる所を行はば、之を行ふ者は既に我に非ず、乃我の裏に居る罪なり。故に我此の法を觀る、我善を行はんと欲する時惡は我の前は伏す。蓋我は内なる人に由りて、神の律法を悦ぶ。然れども我が肢體の中に、他の律法在りて、我が智慧の律法と戦ひ、我を我が肢



體の中に在る罪の律法の據と爲すを見る……  
 我が神に感謝す、イエスキリストス我等の主  
 に因りてなり、是くの如く我自ら我が智慧を以  
 て、神の律法に服し、亦肉を以て罪の律法に服す

(ローマ三、廿五)

此言の中に現はされて居る事實は、實に倫理上最  
 も困難とする問題である。即ち倫理の實行問題で  
 あつて、自然の倫理學——基督教外の徳教は此問題  
 に對して全く力が無いのである。何となれば倫理  
 の實行問題は即ち人間の天性の改造問題である。  
 人間の天性を改造して、罪惡的傾向に勝利を占め

る力を人間に與へない間は、倫理の實行は言ふべ  
 くして行ふべからざることである。然らば天性を  
 改造することは如何にして出来るのか、罪惡的  
 傾向に勝つのは何處から取るか、出来るのか、  
 人自から之を爲すことが出来るか、決して  
 出来ない。既に此天性も人自から造つたものでは  
 なく、受けたるものである。して見れば此天性を改  
 造する力も矢張受けるのである。即ち此自然界の  
 上に位する絶對の存在よりして受けるのである  
 夫故に之を恩寵と名づけるのである。恩寵といふ  
 語は原語の意味を取ていふと、善なる賜といふこ



とである、或は賜はる所の善と有ふ意味である。何となれば我々は自分に善を有て居らぬ故に他より善を受けなければならぬ。我々の良心の倫理法も本来善なる性質のものであつても、つまり善を與へる力のないものである、さうば我々は善に對して全く失望すべきか？、否、然らでない。我々の善はないが、我々の天性と我々の良心の外に善の實體が存在して居る、此善の實體、道德の圓滿は神である。夫故に我々は道德の圓滿を神に於て求めねばならぬ。神に求むるには先づ我々を神より遮

さる所の凡ての障害物を取除けなければならぬ。此障害物は何であるか、外部の自然であるか？ 然うではない。外部の自然は自から働くものではないから、只た夫れ丈けて我々を神より離す働きを爲すものではない。此障害物は自から判断をし分別をして働くものにある、即ち我々人間自身にある。大詩人ゲーテの言に「運命は我等の身邊に多くの深い穴を掘つた。併し其内最も深い穴は我等の心にある」といふた。して見れば自から己れの心を斥けなければ神に近づくことが出来ぬ。己れの意旨を一切神の意旨の犠牲となして、基督自から我



々に示された模範に倣ふて己れの旨を求めず、只だ天の父の旨を求むる様にして行くなれば、我々は神の恩寵に於て倫理的實力を得、道德の圓滿に向て真直に進んで行くことが出来る。之に由て見れば、真正の宗教即ち基督教を離れた倫理は其根底に於て薄弱だといふことが明かになる。私が最初申した不死と道德の圓滿といふ人間の二の大希望を満足せしめんとするには、必竟自然的生活と律法的生活の二道を棄て、第三の道即ち恩寵的生活の道を尋ねなければならぬ、そして此道に於て充分己れを修養せねばならぬ。



# 天 箴

人は偉大なる物なり(ソロモン書二十の六章)

夫れ人は萬有の評價者且審判者よりして世界萬物の上に首長として立てられたるほど偉大なるものである。基督キリストの語に、「人若し全世界を獲るともその靈魂を喪は、何の益あらんや」と。人は偉大なる物である。如何となれば此物は大きな商議によりて至大者から出たからである、且其價值は大なるものである、「神曰く、我儕人を造らむ(創世記六章)と。又「神、地の塵を以て人を造り、生氣を嘘



して其鼻に入れたり、而人成て生靈となれり(同上三)と。

人は偉大なる物である。如何となれば此物は偉大なる意義を有し且非常に多くのものを其中に含有して居るからである、「神乃ち己の像に依て人を造れり、之を造て神の像に肖とれり(同上七)」と。

人は偉大なる物である。如何となれば偉大なる目的の爲に使命せられたからである。「神、人を造り、海魚、飛鳥、牲畜を治め、亦全地及び凡そ地に匍へる昆虫を治めしむ(同上七)」と。

人は偉大なる物である。故に萬物の變革も轉覆も

此物の沈淪に由來せるのである。「我等知る、凡の受造物は今に至るまで共に嘆き、共に苦しむ、蓋受造物の虚しきに服せしは、其欲する所にあらず、乃ち之を服せしめし者に由れり(ヨハネの二拾二)」と。

此の偉大なる物は、その人を自身に於て現に如何に價せられつゝある乎。何ものにも服従せしめずにあるか、何ものとも交換せずにある乎。

人は恰も幼少の時から他郷に放逐せられて、自己の尊大なる出生と使命とを忘れた大王の儲嗣のやうなものである。

夫故に人に取つて最初と最終の教訓は「已を知れ」



と云ふ金言てなければならぬ。

### 調 體

衆往て之を葬らんと欲す、惟彼より腦骨の外何物をも得ざりき(列王紀下九)

此の調體は恐らく或る豪傑の戴いたものかも知れぬ。してその豪傑たるや、赫々なる偉業を以て全世界を輝かし、その偉名は世人の口より口に傳はる、日の東より西に唱へられ、或人は大なる尊敬と歡喜とを以て、その大物を談じ、或は物せるもあらう。或る亦一方には嫉妬を以て其人物を物色せる

もあらう。今や其人如何、調體は空である、蓋である時は沈黙して居る、史傳は敗壞して讀めぬ。豪傑の頭に宿つた物から只調體のみ名なき遺つて居る實に「彼より腦骨の外何物をも得ぬ」のである。

此調體には恐らく或る高名なる哲人の高尙なる思想が集つて居たのであらう。崇高深遠なる計畫が織出されてあつたであらう。哲學上の問題は思念せられ、而之に對する深遠なる判断が案出されてあつたであらう。此の調體の裡には恐らく英才と稱せらるゝものが置かれたのであらう。而も今如何、調體は全く虚である、空である。



此干乾びたる鬪體は恐らく或る富者の屬であつたかも知れぬ。してその富者たるや、福音書中の富者の如く奢侈に生活し、ソロモンの如く榮華に着幾日となく金殿玉樓に在て快樂の日を送つたものであらう。而も華美を極めた其宮殿を以て華美ともせず、宏夫なる其樓閣を以て宏夫とも思はなかつたのである。今やその鬪體は全く空虚である一杯の土にも覆はれて居らぬ。此の頭は恐らく飽くを知らぬ功名心の居宅であつたかも知れぬ。して其の功名心は勤勞よりする節儉を壓抑し、吞噬せ、真正なる功績を放逐し、或は

破壊し、何處に於ても、何の事業に對しても、自己中心を專一とし、若し己より上に何人か立つを見る、と眠れない、食は喉を通らないのである。して職位と位階とで暮がつて居た。今や彼は全く空虚となつて、何人にも敬自されずに共同墓地に棄てられてある。

此鬪體は誘惑的の裝飾と華美とを以て満され、其美は衆人の心目を眩まし、我より外に美はないと揚言して居つたのである。けれども今やそれはどうである、鬪體は全く空虚である、人々は鼻のまみをして居る……



恐らく此の罽屨は事業家の男兒が所有であつたであらう。日夜休息もせず、公私の事業にたづさはつて、終生身を之に献じ、何時も活動しつゝ、絶へず「未だ終結に至らぬ」と言つて居つたのであらう。然るに今や其人は全く虚空なる罽屨である。恐らく……

然し此の罽屨が何者であつたかを知れば、我々の爲に如何なる利益があるか、知つたからとてそれが元と通り爲るものではない。左らば其何者たるを問ふはどうしても宜しからぬであらうか、否。今や彼は生存者の爲に、神靈上趣味深き教師とな

つて居る。以前の虚偽擾搖に代へて、完全なる安心と立命とを己が運命に、明に描いて居る。世が貴ふところのものを勇敢に大膽に輕蔑する決心を明に表白して居る。生者の心を誘惑する所の者に對する賢明なる無慾を印して居る。深き思想はそれにある。泛んで居る。而も此の思想は現世のものでもない。又此の地上に關する思想でもなく。又地上に就ての思想でもない。呼んで罽屨の賢い安泰を羨む所の、活きてる罽屨を有つて居る人間は世に幾人ある……

青年苦行者が聖マカリーに問ふに、



父よ、如何すれば救を得らるゝか、何卒救へ給ひ  
神の人は答へて

墓へ行つて死者を讃めよ――

青年苦行者は墓へ行つて長らく頻りと讃めた。

▼カサイは問ふに

何んと言つた――

何も――

賢き老翁は、

復行つて死者を悪口せよ――

青年は行つて悪口し、死者の干乾びた骨に石を撃つた。

老翁は又語を次いで、

何を言つた――

何も――と青年修士は答へた。

▼カサイの曰ふに、

爾若し救はれむとを望みて、己の生命を失はざらんと思ふならば、死者の如く生活せよ、譽められても誇るな、悪口せられても恐るゝな、黙して忍べ、慾の肉体に於て無慾たれ、面して死者の側  
瞽の如く善に堅固なれ。



## 家より何を書き贈りし乎

我々は、家より贈り越した書状の、外國に在留する者の爲には、殊の外愉快に、樂しむ感じて、家より贈り來た書状を受取りたる者に向つて「家より何を書き贈つて來た乎」と問ふものが度々あらう。然し此間は吾人一般の人類に關係して居る。凡て吾々は遠き外國に寄留して居るからである。さらば親愛なる兄弟、姉妹よ、家より何を書き贈りたるか。書いたたんと書いた、遂に此書状からして全一部の書が成り立つて居る。今や書贈られない。何故な

れば、最う此の上に多く書くべきものがないからである。我々の爲に必要なものは悉皆書いてある。

さて其書状に書いてあるものは何んである、家ではどんな様子である。萬端都合が善い、父は相も變らず我々を愛して居る、兄も以前同様我々を思つて呉れる、我々の爲に家に美麗な部屋が準備されてある、彼處に於て多くの喜ぶ賞を以て我々を待つて居るとある。此外我々が自己の家、自己の親族を忘れぬやう、又外國に在りて悪習に誘惑されぬやう、悪交際を結



はぬやう、して家に歸るに就いて妨げとなる事は一切避忌するやうの條件も書いてある。同教者——<sup>キリスト教</sup>基督教徒よ、卿は此語を解し得るか、卿の手には既に久しき以前より此書状が等である、何故なれば卿の手には聖書があるからである、どうか、卿には家から何を書き贈つて来た、聖書は何を書いてあるか、知つて居る乎。



### 自然と人生

本題は原文には自然に於ける形象なれども文中の意を汲みて復に斯く代ゆ

水よ、汝は何處に急ぐのである、何處に向つて絶えず其波を轉ぼすのである、何の爲に地の全面を流れ周るのである、何の爲に地の腹中の有ゆる内蔵を潜るのである。

我等が己れの流を以て急ぐのは、地の有ゆる不潔を洗はねばならぬからである。我等が有ゆる處を經過するのは、人の凡ての不義を輯めて、之を天の公義の眼より海の淵に埋めむ爲に持去



ちうと思ふからである。然し我等の凡ての勞は、  
 卿等の助けなくては空しいのである。傷める心  
 から出る悔改めの涙の一滴は、テタル及びモス  
 ラト河の有ゆる水よりも、地の面を洗ふことが  
 尙ほ強ひるのである。

地よ、汝は何の爲に同一の途を以て常に太陽の周  
 圍を馳せ廻るのである、せめては好奇心でも起し  
 て、時には太陽に近いたり、或は其より遠くではど  
 うである。

好奇心とや、それは余に何の要ある、余は我が造物  
 主が示し給へる途を往くのである。して己の運

命に満足してをる。今余には常に晝と夜とがあ  
 たる、春夏秋冬がある。然し余好して若し此位置を  
 去つたならば、最早此順序はないであらう。彗星  
 は宜しく其曲つた途を彷徨して、傲然太陽に向  
 つて進むに任すべし、彼等も時としては唯暫時  
 中天より輝ける尾を現はして居ることがある  
 其代り其外の凡ての時に於て彼等は寒氣に凍  
 えて居る、して全く見えななつて居る。  
 鳥よ、如何にして汝は斯く安閑として居るのであ  
 る、如何にして詩きもせず、倉にも積まぬのである  
 をしてどうして朝早くより其歌を始めて居る、雨



も亦どうして之を夜半までも絶間なく歌ふて居るのである。

我々の爲に何の心配することやある。我等に代つて天の父は静いて居る、養つて居る。然らはいかて我等は朝早く起きて神を感謝せず居られやうぞ。卿等は眠つて居る、然し我等は歌ふて居る。何せなれば誰も地上に在つては絶えず造物主を讃揚して居らなければならぬからである。

太陽よ、何の爲に汝は毎日出没するのか、どうして此様に麗はしく其入と其出とを飾つて居るので

ある。三十一

此は卿等が毎日余に於て、卿等の生死の擧象を見むが爲である、して之を見て卿等が余と同じく墓に入り、再又時刻らば永遠の東に出づるものであると悟らせる爲である。余が努めて己れが入を飾るのは、卿等が之を眺めて、己れが入日ひを恐れぬやうに慣らす爲である、そして善き行状を以て之を飾ることを勤めしむる爲である。卿等は太陽が黒き雲と血色の雲の間に没するのを見て、快くは思ふまい、然し余の爲には、狂へる慾望の裡にあつて痛悔の心なくして死する



罪人を見るのは、百倍も辛いのである。

野の花よ、汝等が草場や野の間に、斯くも多く満ちて居るのは何の意味であるか、何の爲に汝等の中の多くの者が、ソロモソでさへ其榮華の極に於ても、装はれなかつた程に飾られてあるのである。

我等が斯く飾られてあるのは、卿等が外面上の裝飾に於て勝る事を求めず、卿等に最も自然なる所の事を以て飾るべきを勤めしむる爲である。我等が斯く造物主の手にて時き散らされてあるのは、卿等が若し我等のやうに、萬事を彼等の至仁なる右手に待つて居るならば、況して卿

等の爲に飾る所の事は、尙更造物主に於て足らない所はないと云ふ事を知らせる爲である。

星よ、何の爲に汝等は斯く親しく毎夜天の蒼穹に出るのか、何の爲に斯く明に其光を輝かす、何の爲に斯く愛嬌氣に凡ての人を凝視めるのである。

此は我等が地上の旅行者に向つて、天の父の家には多くの邸宅のあると云ふ事と、又星と星と其榮華に於て差異あるが如く、死者の復活の日には於て、己が天より出た事を忘れて居た地上の労働者も、それと同様である事を知らせるが爲である。



火よ、何の爲に汝は觸るゝものを皆黒くし、且蝕するか、何處より始めても皆天上に向つて上るの爲何の爲であるか。

此は人の心をして、其焔の爲には地上に於て之に堪ゆるものもないと云ふ事を知らしめんと欲するのである。そして悲みも嘆きもなき所に向はしめんと欲するのである。

磁石よ、汝は南と北とに何を持つて居るのであるか、汝は常に其方へ向ふてはないか。

造物主の意旨の外に何をもちたぬ。余が地上の爲になつて居るのは、卿等の良心が卿等の爲に

なつて居ると同じい。余が南と北とへ向ふ力が無くなつたならば、航海者は不幸である。卿等の心にとつても良心が若し正邪を指す力を失ふ。

○たならば、不幸なものであらう。

噴火山よ、何の爲に汝等は斯く勢猛く燃えて居る又斯く恐しめなつて居るのである、何の爲に斯く多く煙と石と灰と焔とを噴きつゝあるか。

どうして我等が恐しいものとならないで居られやうぞ。我等は主の怒に代りて燃えて居るのである。我等の内には不義者を罰するが爲の審判の日の火が貯へてあるぞ。卿等は我等の上に



あるものを見て驚いて居るが、若し我等の下にある所のものを脚等が一見したならばどうである。神の言が威嚇して居る所の火の湖のあると云ふ事を脚等は疑はないであらう。野よ、畑よ。何の爲に汝等は種子を受けて之を渡さないか。或は口を開いて凡ての物を其濕氣にて呑込み、或は荒らして凡ての物を乾燥にて亡ぼす事のあるのは何の爲であるか。

我等は卿等の靈魂と心との眞似をして居るのである。生命の種子が幾何多く卿等の裡に落ちて居るか、而も成長して實を結ぶ種子か幾何多

くあるか知らん。夫れ祝福を以て轉く者は祝福を以て蒞る、然るに卿等は如何に轉いて居る

### 警者と跛者の葡萄園看守

葡萄園を所有せる主人が、遠く旅行するに當つて警者と跛者と共に其葡萄園の番人をさせたのである。共に不具者であるが故、葡萄を摘取れまいとの主人の用心からであつた。時に葡萄が熟した。警者は目明きの跛者から葡萄の美事に熟した事を聞いて、忽ち一計を案じ出した。跛者を背負うてそれには摘ませたのである。後主人が歸つて來て園を見



るを、盗取つた跡歴然たるので、兩人を呼出して訊問を始めた。すると警者其罪を跛者に塗付けて曰く、盲奴若し目明きの跛者なくば、園に行く路をも辨へぬ筈と存じます。跛者大に之を駁して曰く、愚奴目あつて見るとも、警者なければどうもかうも出来たものではない。互に争ふたが、双方の辨解は徒勞であつた。主人之を聞いて大に怒つて、傍に命じて警者に跛者を背負はせて、共に合せて之を鞭笞したと云ふことである。

警者は是れ人の靈魂である、跛者は肉体である。靈体共に相俟つて罪を犯すに依つて、葡萄園の主人

なる全人類の審判者は、其嚴格なる審判に於て兩者合せて永遠の苦責に問はむとし給ふものと知るべきである。

葡萄の部屋巡り

昔修道院長マカリイの許に、美事な葡萄の房を贈り越したものがあつた。院長は自ら之を味ふことをせずして、之を院内の病者に與へたのである。病者は院長の厚意に感じて篤く神に感謝を捧げた。然し其病者亦自ら味ふことをせずして、之を他の病者に贈物としたのである。贈られたる病者も亦



他へくくと贈り、斯くて葡萄は院内の部屋を一周して終に院長の手許に復贈り越された時、「何人にも何をも負ふ勿れ、唯相愛するを以て償と爲せ、蓋人を愛するは律法を盡すなり(コリ<sup>三</sup>の<sup>十六</sup>)」との聖語の眞意を、活潑に實行されたる愛と節制とを其兄弟間に見るを得て、院長の喜は譬ふるにもものなかつたのである。

### 一 青年の悔悟

一人一個の私事の上に、果して神の照管があるべきものであらう乎。(俗に所謂天の配劑とか若くば

天鑑とか謂ふ事が一私人の上に行はれてあるてあらうかどうかと云ふ意味なり)人生の種々なる境遇に於て性質の活潑で、血性に富んで、して怒り易い、忍耐脆い所の青年輩が、往々自身の上に考を起す事がある。急性にして未熟なる青年の智識は神の照管に關して兎角疑惑を懐かしむるのである。節度もなく、實驗もなき高慢なる智識と、忍耐もなく従順もなき過激なる想像と、輕薄なる思慮とは、年少の通弊として青年をして吾人が生活場裡に生ずる事件を以て、凡て偶然なりとの感を起さしむるのである。斯かる惑むべき疑惑の境遇に、在



つて、而も多少智識と感情に富める所の青年は、その一色の自覺に依れば、自身を以て恰も帆もなく梶手もなくして、荒ら立つ海の波間に漂泊する、重荷を積める船の終焉なものであるとして居るらしい。是に於て乎此等青年を救ふが爲には、其の亂れたる智識の鎮靜と、教導者の實驗とが必要である。然し青年輩の因りて以て疑ふたところの神の照管も、それが動搖した智識を解決せしめずしては止まなかつたのである。爰に沈痛なる心を以て吾人に告白した或人々の生活上の事件が、偶神の照管

の事と、其思想上の新しいして善良なる認識及び生活上の状態の一轉化を來す所の悔悟的教訓となつた事がある。嘗て一青年があつて、一日郊外の散歩を試みてあつたが、何時となく日が暮れたので、止むなく牧者と共に林中に露宿をしたのである。然るに夜半狼が襲ひ來て羊の群を吞噬して仕舞つた。牧者は此出來事を其主人に告げると、主人は之を信じないで彼の青年を疑つたのである。恐らく彼の青年が策を廻らして、夜に乗じて盜賊を入れたのであらうと云ふ事であらう。之を官に告訴するに至つ



た。青年は捕縛せられて裁判官の許に曳かれた。そこへ又姦淫罪を以て告訴せられた犯罪人が来たので、判官は審問を一先延ばして兩人とも監獄に投じたのである。時に亦殺人罪を以て入獄して来た老農夫があつた。然れども三人共皆冤罪であつたのである。斯くと知つた青年は、斯かる境遇に處して益々神の一私人に對する照管を疑はざるを得なくなつたのである。然し此の疑は眞理を追求する心から出た不安なる希望であつて、眞理を排斥する智慧の冷淡なる懷疑ではなかつたのである。青年は神の照管と云ふ問題を千思万考しな

ら七日間獄裡にあつた。一夜夢に語るものがあつた。汝宜しく敬虔なれ、而照管を悟れ、汝が思ひ且行ふたことを忘却してはならぬ。して此の人々が今苦を受くるのは決して理由のないことではないと悟れ。

夢より醒めた青年は、其れと同時に其疑惑よりも醒めたのである。彼は今自己の舊惡を思ひ出した。先年此の村の野で、惡意をもて貧しき農夫某の牛を追出した爲めに、牛は終に獸に噬み殺された事がある。青年は同獄の二人に夢を語ると、二人亦各其舊惡を思ひ出したのである。農夫は曾て川に溺



死せんとする人を見て、之を救ふ機會のあつたに拘らず、只傍看して終に之を救はなかつた事を自白した。又姦淫にて拘引されたと云ふ男は、曾て或る兄弟共が計つて、一寡婦に姦淫罪の名を負はせて、其の父の財産を失はせやうとした其原告の一人に加はつた事のあるのを白状した。同獄人の談話は終に青年の心をして神の照管の有ることを認めしめた、自身の境遇に於ても又他人に於ても人々の秘密の不義を對して、白地に報ゆる神の照管の作用を認めざるを得なかつたのである。是に於て乎青年は疊々の疑を悔悟した。そして洗禮を

受ける望を現はしたのである。釋されて獄を出る前日、一人あつて彼につげた、今それ元の地位に復へれ、衆人を普く鑑臨する目のあることを確信して不義を悔改めよ」と  
此の青年とは誰である。是ぞ高名なるシリヤの聖  
エフレムであつた(エフレム自著の自傳論參考)

雨

或商人が定期市場から馬に乗つて家に歸らうとして、金を入れた提鞆を鞍に結び附けた。すると雨が降つて來た。して商人はびしよ濡に爲つた。



降らでもものなの雨よと、此人は左程悪る氣といふでもなかつたが、神を怨んだのである。商人の行つた途は深林の中を通つて居る。林の中へ通りかゝると、途に盜賊の待伏せて居るのを見て愕いた。賊は銃を馬上の人に突き付けて引金を放つた。が併し賊の銃中の火薬は雨に濡れ切つて居たので、銃は發射しなかつた。其暇に商人は馬を鞭打つて終に危難を遁れた。

彼が漸く氣の落付いた時言つた。天氣の悪るいのを罵つた我は愚てあつた。若し晴天でもあつたならば、余は既に此世の人ではなかつたのである。

して兒等が我の歸宅を待つて居るのも徒爾となつたらうに、左ても余が怨んだ雨は、却つて余の所持品と生命とを救ふたのである。

我々は斯かる例たかしを認めずに、自身の運命を怨訴するけれども、萬事往々斯くの如くにして我々の利益を爲さん爲に仕組まれてあることがある。

## 宗教と人終



明治三十五年十一月廿六日印刷  
明治三十五年十二月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者

山田藏太郎

東京市神田區淡路町四丁目卅壹番地

印刷者

大野喜六

東京市麹町區飯田町四丁目卅壹番地

印刷所

成功堂

東京市麹町區飯田町四丁目卅壹番地

發行所

正教青年會

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地正教本會內



19/26

# 正教青年會

## 主義及び目的

本會は基督正教の主義に據り青年の品性を高尚にし、教會の振興を計り、社會の弊風を矯正するを以て目的とす。

### 會員及び會費

正會員 信徒たるものにして會費として毎月金拾錢を納む

準會員 未信徒にして本會の目的を賛成する者會費納前。

贊助會員 本會の維持の爲め年約金貳圓以上の寄附者とす。

名譽會員 特に本會の爲め功勞ある先輩より推薦する者とす。



本會の事業

例 會 毎月一回第三日曜日午後一時より駿河臺正教神學校講堂に於て開會、先輩の講演及び會員の演説討論をなす。

機關雜誌 毎月一回雜誌「使命」を發行し先輩の寄書并に其他有益なる論説記事を掲げ且つ會の景況を報道して之を會員に給つ。

俱樂部 駿河臺正教本會館内樓上半圓室に設け毎祈禱日は勿論毎日開場して會員相互の交詢に便にす。

文庫 俱樂部内に文庫を置き正教會出版教書は勿論廣く今古の書を集め會員の縦覽に供す。

研究會 毎月一回聖書研究會を開き講師の説明及び會員の質問に應ず。

傳道部 基督教を聴聞せんと欲する青年の爲め本會俱樂部にて傳道を爲す。

演説會 知名の士を聘して時々學術演説會を開き各専門に關する智識を得るに便にす。

音樂會 毎年適宜の時期に於て音樂會を開き音樂の普及を計る。

露語教授 篤實に露語を修めんと欲する者の爲め露語を教授す希望の人は本會俱樂部に就きて詳細問合さるべし。

職業紹介 正教會教役者又は信徒の紹介ある者には苦學生の爲に職業を斡旋すべし。

普く篤志者の義捐金を仰ぐ

本會の目的事業を賛せらるゝ方は賛助會員として入會又は隨時寄附金あらんとを望む。

本會の事務及通信

本會對する一切の通信は東京市神田區淡路町一丁目一番地正教青年會事務所宛にて發信せられ度、用務ある人は本會俱樂部に來訪せられたし。



本會の事業

例

會 毎月一回第三日曜日午後一時より駿河臺正教神學校講堂に於て開會、先輩の講演及び會員の演説討論をなす。

機關雜誌

毎月一回雜誌「使命」を發行し先輩の寄書并に其他有益なる論說記事を掲げ且つ會の景況を報道して之を會員に施す。

俱樂部

駿河臺正教本會館内樓上半圓室に設け毎祈禱日は勿論毎日開場して會員相互の交詢に便にす。

文庫

俱樂部内に文庫を置き正教會出版教書は勿論廣く今古の書を集め會員の縦覽に供す。

研究會

毎月一回聖書研究會を開き講師の説明及び會員の質問に應ず。

傳道部

基督教を聽聞せんと欲する青年の爲め本會俱樂部にて傳道を爲す。

演說會

知名の士を聘して時々學術演說會を開き各専門に關する智識を得るに便にす。

音樂會

毎年適宜の時期に於て音樂會を開き音樂の普及を計る。

露語教授

篤實に露語を修めんと欲する者の爲め露語を教授す希望の人は本會俱樂部に就きて詳細問合さるべし。

職業紹介

正教會教役者又は信徒の紹介ある者には苦學生の爲に職業を斡旋すべし。

普く篤志者の義捐金を仰ぐ

本會の目的事業を賛せらるゝ方は賛助會員として入會又は隨時寄附金をあらんことを望む。

本會の事務及通信

本會に對する一切の通信は東京市神田區淡路町一丁目一番地正教青年會事務所宛にて發信せられ度、用務ある人は本會俱樂部に來訪せられたし。



露國 エ、スミルソフ原著  
日本 松本高太郎譯

# 須氏教會史 上編

菊版三百三十八頁定價  
金四拾八錢郵稅拾二錢

目次大要(一)總說(二)救主の降臨前に於ける全人類の概況(三)ハリハト  
ス教會の建設●第一時代神學者聖イオアンが死するに至るまでの使徒時  
代の教會史●第一時代の前期○第一章教會の擴張○第二章教會の教誨○  
第三章教會の組織並に政治○第四章初世代ハリステイアンの徳操、奉神  
禮及び教會の嚴正○第五章偽教及び異端●第一時代の後期使徒時代より  
コンスタンテン大帝の時に至るまでの教時史○第一章教會の擴張○第二  
章異端及び岐教○第三章教會の教理並に神學○第四章教職及び教會政治  
○第五章公祈禱並に教會の秩序及びハリステイアンの生活  
以上は唯目次の大要を揚げたるのみ、若し本書に就て一閱するあらば、  
記述の整然として精到なるを諒するに餘りあるべし。久しく讀者の希望  
にありし教會史の出狀今其時を得たり速に購讀あれ。

石川喜三郎譯述

## 有神論

全一冊 定價 金貳拾錢  
(綿布) 郵稅 金六錢

本書は神學上の智識を渴望する青年信徒の爲めに、露國の須氏「哲學要  
論」の一部を譯述したるものなり、所論素より有神論の詳密なるものに  
あらずと雖も、よく其要を提げ、玄を釣りて有神論の概略を輯めたり、  
青年たる者本論の形式に基きて更に思想を練り、研究を進めなば、有神  
哲學の堂奥に入る構柵たるを得べきなり。本書の目次は左の如し。

(第一章)宇宙論證(第二章)宇宙論證の價值(第三章)意匠論證(第四章)意  
匠論證に對する評論の辨明(第五章)實體論證(第六章)實體論證に對する  
評論の辨明(第七章)道義的論證(第八章)有神論證の價值(第九章)神の資  
性(第十章)神の實體上の性質を論ず(第十一章)神は靈にして有意識個位  
的の實在者なり(第十二章)神は最完全の智慧なるを論ず(第十三章)神は



最圓滿の意志なるを論ず(第十四章)神は圓滿なる心情なるを論ず(第十五章)神と世界との關係(第十六章)二元論(第十七章)自然有神論(第十八章)凡神論(第十九章)凡神論評論(第二十章)結論(第二十一章)一神教(第二十二章)神の照管を論ず(第二十三章)照管否定説の評論

山田 藏 太郎著

# 天國と悔改

全一冊

實價金六錢

郵税金貳錢

本書は全篇を(上)天國は近けり(中)悔い改めよ(下)永生に入るの門、の三段に分ち、信仰に入るは如何にすべしやを詳説せるもの、傳道界の急先鋒たるに適す。

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

## 發兌

## 正教本會事務所

# 正教新報

毎月三回(一日十五日)發行

定價 一部五錢半 少年五十二錢

一ヶ年九十五錢 郵税一冊五厘宛

正教新報

正教新報

正教新報

正教新報

正教新報

は日本ハリストス正教會の純機關雜誌にして、ハリストス正教會の教理教風を擴布し擁護するを以て本領となす。はハリストス正教の主義に基き社會の宗教教育文學其他あらゆる時事の問題につき直論講議毫も假借する所なきを以て主眼となす

は毎號一正教新報、論說、雜錄、問答、雜報、外報、教界時論、黨報の各欄に別ち、各擔任記者を定め、評論の穩健なる、記事の正確なる、材料の豊富なるを以て特色となす。は各教役者信徒の質問に對し問答庵主の丁寧親切なる解答を掲げ忠實なる教理の研鑽者に最大の便益を與ふるを期す。若し夫れ重大なる事項に關しては最上神品の親教を仰ぎ明鮮直截快力亂麻を断つ概あらしむ。は内外の新聞に就き事教界に關するものは細大報遺して遺漏なきを期すその内國各教派の手になる雜誌の言論は掲載して一目時論の梗概を知らしむ。



正教新報

は別に寄書欄を設け門戸を開放して教會内外の寄書を歓迎す  
國家の治安を妨害せず、教會の定理教規に抵觸せざる限りに  
於て十分なる言論の自由を許す。  
は我國宗教雜誌中の最も古きものにして、其主義主張は十年  
一日の愆らざる、價格の低廉なるを以て特色となす、若し夫れ發行期  
誇りと爲す所、既在斯の如く將來亦斯の如けん。

發行所

東京市神田區駿河臺  
北甲賀町十三番地

愛

々

社

正教要話

毎月一回(廿五日)發行  
定價一冊四錢半年廿三錢  
一ヶ年四十二錢全國無遞送料

正教要話

は最も平易なる言文一致の文章を以てハリストス正教の教理  
教訓を講明し、全國多數の信者進教者の修養に資し、靈益を  
計るを以て主眼となす。  
は各教會の神品教役者の説教を訓を掲げ、時ありては外國神

正教要話

品、古代聖師父の説教遺訓を譯載するを以て本領となす。  
は別に難録、史傳の欄を設け趣味津津たる或語雜事を掲げ、  
古今の聖人、殉教者其他教界の偉人修女の言行を紹介して一  
般信者の矜式となすを以て特色となす。  
は通俗問答、教會略報の欄を置き簡明平易なる文字を以て讀  
者の質問に答へ全國各教會の近況を報道して知見の開拓を希  
圖す。

正教要話

は毎號高尚優美なる口書並に挿書を加ふ、其新珍にして鮮明  
なるは既に内外の定評あり敢て暇々の辨を要せず。  
は目下第廿六號を發行するの好運に遭遇し、わが教會雜誌中  
最多数の愛讀者を有し前途益々多望なり。我が社は聊か愛讀  
者諸子の好意に酬いんが爲めに、來る十二月發行の第二十七  
號より、山田枯柳氏に囑託して聖地「パレスチナ」の風土記を  
連載すべし。右は歐洲の聖地探家、の精緻なる研究調査に基  
ける該博なる材料を英、露等の書卷より得て記述する者なれ  
ば、讀者に興味と實益とを供する事少なからざるを信ず。且  
つ同記の中に挿入する圖畫は、水島落葉氏自ら職工を督勵し  
て製版せらるゝ者なれば、錦上更に花を添ふるの觀あるべし。

正教要話

は毎號高尚優美なる口書並に挿書を加ふ、其新珍にして鮮明  
なるは既に内外の定評あり敢て暇々の辨を要せず。  
は目下第廿六號を發行するの好運に遭遇し、わが教會雜誌中  
最多数の愛讀者を有し前途益々多望なり。我が社は聊か愛讀  
者諸子の好意に酬いんが爲めに、來る十二月發行の第二十七  
號より、山田枯柳氏に囑託して聖地「パレスチナ」の風土記を  
連載すべし。右は歐洲の聖地探家、の精緻なる研究調査に基  
ける該博なる材料を英、露等の書卷より得て記述する者なれ  
ば、讀者に興味と實益とを供する事少なからざるを信ず。且  
つ同記の中に挿入する圖畫は、水島落葉氏自ら職工を督勵し  
て製版せらるゝ者なれば、錦上更に花を添ふるの觀あるべし。

發行所

東京市神田區駿河臺  
正教本會内

教

要

社



製本は頗る奇麗繪畫は概ね鮮明にして多數

# 正教小書帖

近日刊行

先に發行した『聖經畫帖』は、早く品切れて、今や全く一冊も有りません、所て今にも該帖を注文する御方が往々あります。けれども、なか／＼あのやうな帖は、再版する事が、容易に出来ません、僅かに今こゝに掲げた如き『小書帖』を發行して、聊か或一部分の需用に應ずるばかりです。今度のは、教理の順序に依て排列したのですから、傳教師諸君が教の講義をなすのに、大に便利です。此中には、諸君の御覽になつた繪も澤山ありまじやうが、又未だ御覽にならぬのも有りまじやう。而して價は未定ですけれども、至つて低廉になる積りです。とても大形な色刷のと云ふては、當分出来る見込が有りません。併し此は小くても大抵鮮明です先づ無いよりはましと思ふて御使用を願います。

## 發行所は

東京神田駿河臺東  
紅梅町正教本會内

## 教要社

●裏錦 正教の見地により普く婦道を論究す

●論説 宗教道德に關する論文を掲ぐ

●教訓 信仰を奨勵して婦徳を全ふせしむるを努む

●辭藻 婦人信徒の思潮を見るを得べく毎號趣味津津

# 裏錦

毎月一回 一部金七錢半ケ年  
金參拾六錢〇一ケ  
年金七十二錢郵税  
十五日發 不要

●庭訓 教會兒童の爲め通俗にして面白き談話あり

●小園 珍瓏玉の如き女兒の無邪氣なる面影を見るべく

●殘繡 正教女子文學此欄にありて毎號賑へり

●校報 女子神學校の校報あり同校々友會報あり

●會報 正教婦人幹恤會、各地婦人會會報を見るへし

東京神田區北甲賀町三十番地

發行●社●網●尚●發



- 社説 本會の主義目的に據り青年の啓蒙者を以て任す
- 講演 學識ある先輩の本會例会に於る講演筆記を掲ぐ
- 論説 宗教道德其他専門の學科に關する論文を掲ぐ
- 思想 會員の寄書を掲げ以て相互の研究に資す

毎月一回

正教青年會  
機關雜誌

# 使命

五日發行

一部金五錢 一ヶ年前金  
六拾錢 郵税 一部金五厘  
廣告料 一行二十七字 詰  
金拾五錢 一頁金五圓

- 史傳 古聖の傳記又は露國文豪傳等を紹介す
- 文藻 露國文學を紹介せんことは本欄の任する所なり
- 雜錄 有益なる材料を撰み以て智識の倉庫たらしむ
- 會報 本會一切の會事を報道す

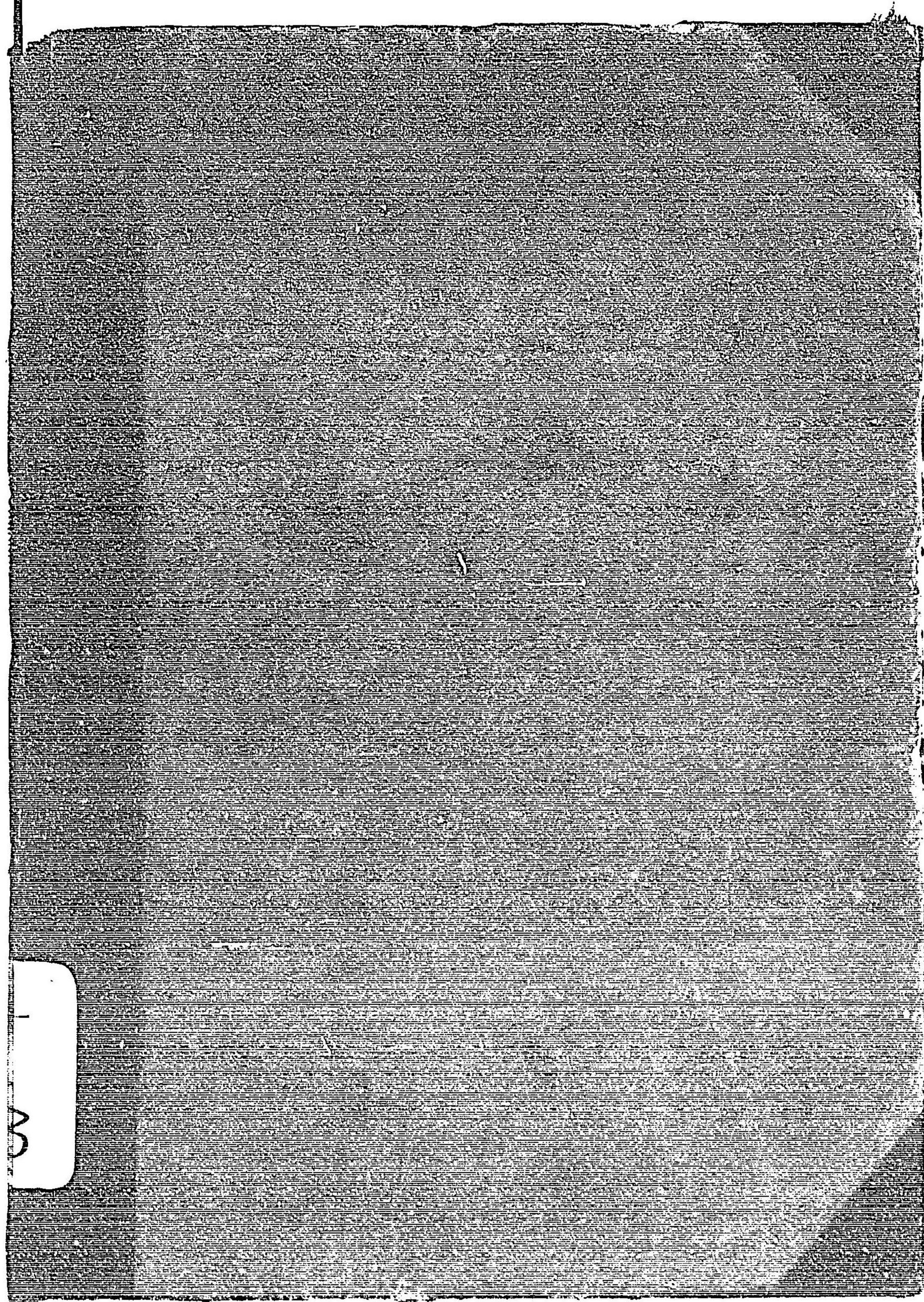
東京市神田區濱路一丁目一番地

發行所 正教青年會事務所 使命社



74
82





3